

温暖化政策、待望の書刊行される！

2012/07/09

書評

温暖化政策

澤 昭裕



国際環境経済研究所所長

温暖化政策に関わる者すべてが待望していた書が刊行された。英文による日本の政策提案である。

編著者は山口光恒 東京大学先端科学技術研究センター 特任教授。同教授は、温暖化政策の世界的学者であり、IPCC の報告書のリードオーサーはもちろん、日本国内でも政策形成に関連するさまざまな場で委員などを務められている。その権威が編集された新刊の目次をご覧いただきたい。気候変動対策の究極的目的に戻って検討を加えることから始め、主にボトムアップ的なアプローチをベースに、エネルギー効率、技術移転、排出量取引制度や自主的手法などの政策措置などの論点を、それぞれの専門家が鋭くえぐっている。

特に、日本の自主行動計画の有効性やキャップアンドトレードの非適合性などについて、英文できちんと解説したものは、これまでほとんどなかったと言ってよい。その意味でも非常に貴重な文献だし、今後の IPCC での新報告書検討のプロセスにも影響を与えることは間違いない。温暖化政策研究者や政策担当者、さらに産業界での温暖化対策に関連する部署におられる方々にとっては、必読の書と言えよう。

下に、編著者ご自身による解説を掲げて、ここにご紹介しておきたい。

本のタイトル : Climate Change Mitigation, A balanced approach to climate change

著者 : 山口光恒 (編著)、秋元圭吾、十市 勉、三村信男、岡崎照夫、渡邊浩之、大畠明、井上秀雄、天野肇、荻本和彦

出版社 : Springer, London

出版年月 : 2012 年 7 月

目次と概要

Chapter 1. Introduction. 山口光恒

Chapter 2. The ultimate objective of climate response strategies,
and a desirable and feasible international framework.山口光恒

Chapter 3. Mitigation targets and effort-sharing among regions and countries.秋元圭吾

Chapter 4. Balance between energy security and mitigation responses 十市 勉

Chapter 5. Cost of mitigation.秋元圭吾

Chapter 6. Balance between mitigation and adaptation 三村信男

Chapter 7. Policies and measures.山口光恒

Chapter 8. Potential for energy efficiency improvement and barriers.秋元圭吾

Chapter 9. Technology diffusion and development

岡崎照夫、山口光恒 (第 1 節)、渡邊浩之、大畠明、井上秀雄、天野肇 (第 2 節)

Chapter 10. Nuclear Accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant,
and its impact on Japanese energy and climate policy 荻本和彦・山口光恒

Chapter 11. Epilogue, IPCC and communication 山口光恒

なお、Forward（前書き）を（公財）地球環境産業技術研究機構の茅陽一理事長、ブックカバーの推薦文をベニス大学学長の Carlo Carraro 教授、カリフォルニア大学教授 David Victor 教授、そして WBCSD（World Business Council for Sustainable Development）会長の Chad Holiday 氏（前 Du Pont 会長）から頂いている。

この本の目的は気候変動対策を縦のバランス（温暖化だけの観点から見てどこまで対策を進めるのが適切か）、及び横のバランス（その水準は現在の世界の緊急課題（貧困、病気、エネルギー安全保障、金融・経済危機などとの比較で適切か）の両面から見ることの大切さを主張している。この結果 2℃目標とトップダウン方式の見直しも提案している。更に目指すべき対策のレベルやコスト、エネルギー効率の世界レベルでの比較、3E（経済、環境、エネルギー安全保障）のバランス、緩和と適応のバランス、そして政策措置としては日本の自主的手法や EU ETS の評価、再生可能エネルギーへの補助金、セクtralアプローチの例としての海運の動きなども網羅している。技術についてはトヨタと新日鐵の具体例から如何に技術開発と普及が大切かを説き、次いで原子力事故と日本のエネルギー・温暖化政策への影響、そして最後に IPCC のコミュニケーション問題について論じている。

上記の通り世界に対する日本からの提案の書であると同時に、国内対策としてはなぜ日本で自主的手法が機能するのか、Cap and trade が必ずしも最善の対策とはならないのかについて頁をさいて説明している。後者についてはきちんとまとまった英文の原稿がほとんど無い中で何かの折りに利用して頂ければ幸いである。

追って、本の内容については下記 URL ご参照

（出版社の頁）

<http://www.springer.com/978-1-4471-4227-0> （本のチラシはここからも閲覧可能）

（Amazon の頁）

<http://www.amazon.co.jp/Climate-Change-Mitigation-Lecture-Energy/dp/1447142276>

（Barnes & Noble の頁）

<http://www.barnesandnoble.com/w/climate-change-mitigation-mitsutsune-yamaguchi/1110838898>